

解題

黒木勘藏

近松門左衛門一代の作に係る淨瑠璃百十餘篇中より、その代表的名作として選定した五十四篇を、上下二巻として年代順に收めた。選定の方針としては先づ近松淨瑠璃の精華と稱へらるゝ世物語廿四篇は全部これを收載し、次に時代物に關しては、初作より絶筆に至るまでの範圍に互つての代表作、即ち題材上注目すべきもの、戯曲の結構上、措辭上勝れたるもの、または前を承けて後を開くやうな歴史的意義の深きもの、乃至はその作品の今尙舞臺に生命を有するもの等を成るべく採ることとした。自然初期の作が少く、圓熟時代の作が多くなつたのは止むを得ない次第である。今左に本巻に收めた三十篇について簡單に解題を加へる。

花山院后諍

校訂者の見たものに四本ある。いづれも繪入細字本で第一本は寛文十三年(延寶元)正月八文字屋

八左衛門の刊行にかゝる。第二本は第一本卷末の刊行月日を削つたのみで、他は同一版式であるから後刷と思はれる。第三本は宇治加賀掾の正本で山本九兵衛版である、但し刊行年月は明かでない。第四本は「きさきあらそひ」と題し、貞享四年五月江戸のうろこがた屋から刊行されて居る。右四本を比較して見るに第一本が原作で、第三本・第四本は、これに多少の改修を加へたに過ぎない。尤も第四本

題解

は段取も文章も相應に改められてゐる（「新群書類從」第九所收）その中の第一本の筋は次のやうである。花山院の女御弘徽殿と藤壺との嫉妬の争に、平政盛と源頼光との勢力争を取合せて想を構へ、五段に仕立てたもので、政盛の後押で、弘徽殿女御を殺さうとした藤壺の女御は、帝の逆鱗にふれて却つて横死する。そしてその怨念が弘徽殿女御の居間の屏風に蛇身となつて現れたり、または青女房となつて庭に出たりして、遂に弘徽殿女御を憐殺する。帝は世をはかなみ給ひて御出家になるが、安倍晴明の祈禱によつて女御は蘇生する。然るに執念深い藤壺の怨靈は颯となつて法皇の御所に入込んだが、晴明に觀破されると、悪鬼に化して多くの眷屬を引連れて押寄せたところが、頼光四天王等の爲に退治されるといふに終る。

この正本の所屬流派は不明であるが、版式や挿繪によつて見れば同年代の井上播磨掾の正本に酷似する。一樂子の「外題年鑑」の井上播磨掾の語り物外題中にある「花山院物語」（正本未見）と同一物ではなからうかと推測される。

第三本は「外題年鑑」の宇治加賀掾の語り物外題中に「弘徽殿嫉妬打」とあり、齋藤月岑の「聲

曲類纂きょくるいさんに「近松作」と註記されてあるものと同一と考へる。今これを第一本と比較するに、第四段迄は文章迄も殆んど同一であるが、第五段は頼光四天王が藤壺の怨靈を退治する公平式の場面を改めて、女御蘇生・怨靈退散を祝つて、千代松といふ少女に萬歳樂の舞を舞はせるといふやうに和なごげられて居る。この作の「道行」「神おろし」「萬歳樂の舞」の三章が加賀掾の段物集「竹子集」(延寶六年八月刊)に載つて居るのによつて考へるに遅くも延寶六年迄の作たる事は明かである。尙また注目すべきは、三段目の怨靈出現の場面で、この作では大蛇は屏風にからむのではなくて庭に現れることになつて居るが、併しその現れ方は敘述されて居ない。ところがこの場面を脚色して歌舞伎の舞臺にかけたのが即ち延寶五年都萬太夫座上場の有名な近松の「藤壺の怨靈」である。「古今役者大全」の所傳では、藤壺の怨靈が藤の花から大蛇になる趣向であつたといふが、當時の繪入狂言本が無いから委曲を知るを得ない。併し大體の筋立は「花山院后諍」の改作たる「弘徽殿鶉羽産家」(正徳二年作)の第一段の切によつて推察出来る。

そこで當然問題となるべきは「藤壺の怨靈」の原作たる寛文十三年正月刊行の「花山院后諍」の作者は誰かといふ事である。私は次の理由によつて、これを近松の作であると推定し度い。

第一にこの作の主旨は藤壺の嫉妬の怨靈出現であるが、加賀掾の正本も、都萬太夫座の脚本も、原作と本質を同じうし、當然同一作者の手によつて次第に展開せらるべき脚色と見られる事である。

第二に近松六十歳の時の作「弘徽殿鶉羽産家」の道行に、この作の道行がそつくりその借用ひら

れて居る事である。「鶉羽産家」は勿論「后諍」の改作であるが、全篇を通じて非常に筋が複雑になり、文章も全然面目を一新して居るに拘らず、全篇中で最も文章に彫琢を加へ、華を飾るべき道行文に大間おほまで古風な四十年も前のものをその儘取つてある、これを何と見るべきであるか、他人の作から借りたとはどうしても考へられないではないか。これは其原作が自己の青年時代の作たる事を裏書き記念する意味を以て他の部分との不調和を忍んで取入れたと解釋するのが穩當ではなからうか。

第三に同じ關係は、延寶四年廿四歳の作「瀧口横笛」と正徳四年六十二歳の作「娥歌加留多」との間にもあるのは、第二の理由の有力な傍證である。故に私は「花山院后諍」を近松二十歳の時の作と推定する。少し若過ぎるといふ口實だけで、以上の理由を一蹴するのは天才近松に對してはどうかと思ふ。

本名作集には「后諍」系統の代表作として、又近世戯曲の「うはなり物」の原作として、且又近松初期の作風を最もよく示すものとして、延寶五六年「の作と考へられる宇治加賀掾の正本を採つた。校訂用の原本は十七行十六丁の繪入細字本である。また千代松萬歳樂の舞の原本挿圖は「竹子集」から採つたので、節附等に多少の相違がある。

世 繼 會 我

天和三年九月刊。宇治加賀掾正本。作者三十一歳。會我兄弟が本望を遂げて相果てた後、鬼王國

三郎虎少將等が朝比奈三郎の後援のもとに、兄弟に恨ある新開荒四郎御所の五郎丸を討ち、頼朝から十郎の遺子祐若に曾我の本領河津の庄を賜つて家を再興するといふ筋、これ「世繼曾我」と題した所以である。曾我兄弟の復讐を材題とした淨瑠璃は近松の作にだけでも十篇からあるが、これはその最初のもので、構想の放棄な、情味の豊かな、如何にも青年詩人の筆らしい感じのする作柄である。復讐後の兄弟に縁故のある人物を中心として脚色した點が普通の曾我物と異なる構想であつて、朝比奈の豪俠、鬼王團三郎の義を立て抜く模様、虎少將の氣轉等がいづれもよく描かれて人物が活動して居る。その上廓情調の出で居ること、舞踊的要素の多いこと、殊に俗謡を豊富に取入れて居ることなどは注意すべき點である。竹木座創立の際（近松傳參照）義太夫が語つて名聲を揚げた曲である。その時の模様を「操年代記」は次のやうに述べて居る。

淨瑠璃は嘉太夫いたされし世繼そが、これ義太夫出世のはじまり、町中の見物此ふし事になづみぬ。「げに受け難き人の體を受けながら」と二段目待つ夜の恨、「さりとては戀は曲者皆人の」と三段目道行、立つ子這ふ子、此二所の口眞似せぬ者なし。

また此淨瑠璃については、その道行の中へ「馬方いやよほんくほ」と踊歌を入れたのは、前後の情趣曲調を破るもので、今聞いても汗を流すといつて、作者自身が三十年後においても氣にかけて居つたといふ有名な話（「鸚鵡が柚」の序文）も傳へられてゐる。「外題年鑑」に「此淨瑠璃の時（加賀権座上場の時）朝比奈の人形に足を付け初めしより諸流共に立物人形に足を付けたり」とある。

校訂用原本は八行五十六丁本で、十行三十二丁本を参照した。

賢女手習けんじよのてまらひ并な新曆しんれき

貞享二年正月刊。竹本義太夫正本。

貞享二年正月京都の宇治加賀掾が下阪して、この前年初めて櫓を揚げた竹本義太夫と技を競ふべく、西鶴の作「曆」を興行した時に、義太夫がこれに對抗する爲に上演して、當時京阪樂壇の覇者の觀があつた加賀掾を首尾よく破つた淨瑠璃として、義太夫劇史上大いに注目すべき作である。

菊池道清の遺子瑠璃姫・太刀丸の二人が、瑠璃姫の情人左中將藤原實方と共に流離の苦を嘗めつつも、遂に年來嫌の信じた愛染明王の加護を得て、父道清の仇敵三位別當安國を蝦夷において討果すといふ筋である。

作の發端に宣明曆を改めて貞享新曆を用ひるやうになつた事を當込んだ仕組があつて、それが動機で事件が展開するやうに作られて居る。「外編年鑑」所載の井上播磨掾の語り物「賢女手習鑑」は未見の書であるが、竹本義太夫も竹本座創立の頃これを語つて居る點から考へるに、この淨瑠璃を本として、「曆」に對抗すべく新曆頒布の事を取入れて改修を加へた作ではなからうかと考へられる。「賢女手習新曆」といふ熟さない、他に類例の無い外題もそれを暗示するやうに思はれる。

随分大膽な荒唐無稽の脚色であるが、場面の變化や、操の働きなどを十分に考慮してあつて、舞臺の上では相當に見物を喜ばせ得たらうと思はれる仕組である。また第二段の瑠璃姫内の段に於ける姫の傅平馬之丞述懐の場面は、謡曲「鉢の木」の翻案ではなからうかと思はれるやうな趣向であり、實方が姫の寢所へ忍ぶ條は「十二段草紙」の忍びの段、枕問答の段を原據とする濡の場面で、この頃の淨瑠璃にはよく用ひられた趣向であるが、比較的勝れた情味を示して居る。作者については近松との確證は無いが、その文致といひ、また義太夫との關係といひ、近松の作と推定して差支ないと思ふ。

校訂用原本は十七行十五丁の繪入細字本で稀覯書に屬する。その挿繪も全部覆刻して本書に入れて置いた。

門カド 出デ 八ヤ 島シマ

山本土佐掾の正本。著作年代は明かでないが、天和・貞享頃のものかと考へる。

奥州秀衡の許にあつた義經が、兄頼朝に呼應して十萬騎を引率して平家追討の門出の際、源氏の舊臣志田三郎勝平の推舉によつて、佐藤庄司の三子織信・忠信を召連れる。八島の合戦に織信は義經の身代りに立ち、能登守教經の矢先にかゝつて悲壯な最期を遂げる。夫の身の上を案じて戰場へ尋ねて來た織信の妻早姫は、夫の亡靈に逢つて冥途の物語を聞く。平家滅亡後、織信の追善供養が

黒谷に行はれ、繼信は修羅の苦患を解脱する。

平家物語の繼信最期の條が重要な素材となつて、これに志田三郎の活動、繼信の妻の愛着の情、念佛の功力などが加味されて居る。敘述に物語風の脈があり、宗教的靈驗を以て大團圓とするなど、古淨瑠璃型を脱しない作柄であるが、筋が通つて段取りに前後の照應があり、人物もよく活動して居つて、近松初期の作中、佳作の一に擧ぐべきである。殊に三段目の戰場跡の夜景より義經本陣の場は、抒情味の豊かな中に、劇的情景があざやかに浮出てゐる。其他第一段の中の志田庵室より、切の佐藤家氏神社頭の場に於ける兄弟出陣を争ふ爲の小細工を弄する滑稽味や、安西彈正といふ安敵を點出した事や、鷲尾三郎と繼信との間に男色關係を持たせた點など相當に技巧に富んだ作である。

元祿二年五月刊行の竹本義太夫の正本「津戸三郎」はこの作の改題で、作中の志田三郎を津戸三郎と變へ、道行の文句と大團圓とに多少の改修を施したに過ぎぬ。また「外題年鑑」宇治加賀掾語り物に「津戸三郎往生要集」といふがあるが未見の書である。

校訂用の原本には十行廿五丁本を用ひ、十行二十九丁本を参照した。義太夫の正本とは曲節附が餘程變つて居り、また曲節の名稱も随分異つて居る。

凱陣八島

所屬流派を明示した正本はまだ見ないが、「外題年鑑」及び次に引用する「小竹集」^{（六行上）}「操年代記」等によつて宇治加賀掾の正本と断定し得られる。

著作年代は明かでないが、貞享二年八月刊行の加賀掾の段物集「小竹集」の巻頭にこの淨瑠璃の中の「義經道行」「勸進帳」「花子」の三章を掲げ、次に「曆」を載せ以下年代の古い物を配列してあるのによつて考へると、この書所載の淨瑠璃中最新のもので、即ち貞享二年の作ではなからうかと思はれる。加賀掾が大阪へ下つて「曆」を語つて、その名聲が義太夫に及ばなかつたので中止して、この淨瑠璃を上場して評判を取返したとは「操年代記」の所傳である。

作者については「操年代記」は「曆」と同じく西鶴であると言つて居るが、本書の校訂用原本とした鶴屋喜右衛門版の十行三十丁本には巻頭に近松門左衛門作と明記してあるのみならず、文勢筆致亦「曆」に似ず、近松の他の作に類するところから見ても近松と断定すべきである。

題材上「門出八島」の姉妹篇である。平家を討滅した後の義經が、梶原の讒によつて頼朝の怒を買ひ討手向けらるゝ事となつたので、山伏に扮して都を落ち、安宅の關を越えて出羽に到り、繼信の母に邂逅して繼信最期の様を物語り、遂に秀衡の館に入り高館に安穩の日を送つたが、秀衡の死後其子泰衡等四人の兄弟が頼朝に内通して義經を討たうとし、泉三郎一人義を重んじて其妻（繼信の妹）と共に和泉が城に籠つて討死するといふ筋である。

この淨瑠璃は第二段に謡曲「勸進帳」第三段に謡曲「攝待」第四段に狂言「花子」を取入れてあ

るので名高い。

源氏烏帽子折

現存の正本に三種の異本がある。その一は山本土佐掾の正本、他の二つは竹本義太夫の正本で、版式の異なるものは校訂者の見た範圍だけでも通じて七種に及ぶ。近松の作中最も異版の多いもので、それだけ廣く流布されたものとも見られる。

中でも山本土佐掾の正本が原形であらうと思はれる。義朝が長田庄司に殺された後、常盤御前は澁谷金王丸・藤九郎盛長に助けられて長田の毒手を遁れ、三人の幼兒を伴つて大和に落ちようとして伏見の里で雪の夜に憐み宗清に救はれる。のち牛若丸は成人し京三條烏丸の烏帽子屋五郎太夫方にてその女東雲の情によりて左折の烏帽子を求めて元服し、奥州に下り秀衡による（以上四段迄）第五段は機會到來して義經平家追討の門出に際して、奥州五十四郡の人々よりの出陣祝の獻上物が山と積まれ、秀衡は傳家の軍法を物語つて前途を祝ふといふに終る。

然るに元祿三年正月竹本座上場と考定される竹本義太夫の正本「烏帽子折」は第五段を改めて牛若丸が伊勢大神宮に參詣して源氏の開運を祈り、神主は一萬度の御祓を授け、且その年の恵方や吉凶を語るのであるが、こゝは「はしらごよみ」と題する節事になつてゐる。然るに傳本の多い義太

夫節の正本「源氏烏帽子折」では、この第五段の神宮參拜の條と柱曆の節事を省いて、その代りに「三社託宣」(延寶六年正月刊、宇治加賀掾正本、人によつて近松作と推定する)の「二位中將宮めぐり」の詞章を取つて「牛若宮めぐり」と改めて附加してある。これは元祿三年本にはこの條に元祿二年の秋の御遷宮の事や、元祿三年の干支を當込んだ文句があつて、其時限りのものである故と思ふ。寛政五年板の「外題年鑑」竹本座の部に「源氏烏帽子折、二度目、元祿十二年卯年正月二日、山本土佐掾古淨瑠璃」とある(尤も寶曆の原板及び明和板・安永板の三本には「二度目、山本土佐掾古淨瑠璃」は無い)のは、この改訂本の形によつて興行したもので、以後これが「源氏烏帽子折」の定本となつたものであらう。本集に收めたのはこの廣く流布されて居るものである。

題名は謡曲の「烏帽子折」から脱化した第三段目の烏帽子折名盡しの場に基づくことは明かである。この場面の技巧も随分面白いが、より劇的で情趣の深いのは第二段の「常盤御前道行」より宗清館の段である。一中節の「妹が宿」も常磐津の名曲「宗清」も共にこゝから出て居るのみならず、今尚佐渡に語り傳へられる文彌節(山本土佐掾の弟子岡本文彌を祖とす)では、この一段がその代表曲で、同流の曲節は、すべてこの中に網羅されて居ると言はれる。

その他第一段の切に「率塔曳」を仕組んであるのは注目すべきである。

山本土佐掾座上演の時藤九郎盛長と澁谷金王丸との人形に初めて足をつけたと、外題年鑑にある。校訂用底本は八行四十丁本で、七行七十二丁本を参照した。

出^{しゅつ} 世^せ 景^{かげ} 清^{せい}

貞享三年二月四日より竹本座上場。近松が特に義太夫のために始めて執筆した淨瑠璃。時に作者三十四歳。

第一段は東大寺再建柱建の場で、普請奉行重忠を討つて目指す頼朝の手足を奪はうと企て、人夫となつて紛れ込んだ景清が見顯されて危く落延びる。第二段は景清の妾阿古屋が兄伊庭十藏の教唆と嫉妬とに驅られて景清を訴人したので、清水參籠中の景清は捕へられようとしたが辛くもまた逃れる。第三段景清の妻小野姫親子の拷問より景清自首入牢迄。第四段阿古屋の悔悟自殺より景清牢破りの場面。第五段清水の觀世音景清の身代りに立つ事。景清の八島合戦物語（謡曲「景清」による）。景清兩眼を抉つて日向下向に終る。

幸若舞曲「景清」を粉本とした作といはれて居るが、實は兩作の中間に立つ作があるのを見遁してはならぬ。それは寛文十一年刊行の「かげきよ」と題する古淨瑠璃である。この作は珍しく七段に分れて居て次のやうな筋である。景清が頼朝を討たうとして大佛供養の場に山法師に扮して入込んだり、清水觀音供養の時に乞食となつて附狙つたりしたが失收して尾張に奔る。と、情婦あこわうが密訴する、景清は怒つて二人の間の兒のいや若いや石を刺殺した上で捕へられて入牢し、梶原に首

を討たれたが、清水觀音が身代りに立ち、日向宮崎の莊を賜り兩眼を抉つて下るといふのである。あこわうが利慾に迷つて景清を訴人し、景清が二兒を殺す事などは幸若の筋を受けて近松の作への橋渡しをなし、阿古屋は近松によつて全く性格を變へられ、後世の劇の阿古屋がこゝから生れるのである。また「景清牢破」も「阿古屋の琴責」もこの作に基づくなど、後世に及した影響は尠くない。十行三十二丁本によつて校訂した。

團だん 扇せん 會そ 我が

宇治加賀掾正本。著作年代は不明であるが、元祿に入つてのものであらう。元祿十年十月十三日から竹本座上場の際「百日曾我」と改題した。「淨瑠璃譜」に「右淨瑠璃（百日曾我）は京宇治加賀掾芝居にて近松氏作りて團扇曾我と申す外題なりしが、大入にて百日餘りも勤めし故、縁起を以て團扇を百日曾我と改る」とある。

富士の卷狩の發向當日、仁田四郎は海野うしの小太郎と共に頼朝の愛馬松島月毛を得んとして功名を爭ふに始まり、仁田は遊女虎の難を救つて、曾我十郎から本望成就の曉は首を授けるとの言質を得る迄が第一段。第二段は裾野において曾我五郎が海野小太郎に怪まれて「傾城請狀」を讀んで免るゝを主眼とする。第三段は曾我兄弟の討入。第四段は虎少將が團扇賣に扮して兄弟の弟なる越後の陸

上禪師を訪ふ道行から、禪師も兄弟の罪に座して刑せらるゝに臨みて三部經を讀誦して母を慰める場となり、仁田が功名の恩賞として賜る松島月毛に代へて禪師の命乞をする。第五段は兄弟の難が富士の裾野に祀られ盛大な供養を受ける。

朝比奈と仁田の活動を始めとして場面の變化に富み、また「勸進帳」のやつしの「傾城請狀」や、虎少將の道行、三部經讀誦等の節事も多いに拘らず全篇よく纏り、力の籠つた作である。種彦手記の「淨瑠璃本目錄」に

「元祿十三年印本團扇曾我といふ横本一冊あり、此淨瑠璃の行れし事を書ける草紙なり。又元祿十五年俳諧花見車一名「諸國物語」、西鶴門團水作の巻尾に俳諧請狀といふ狂文あり、是は百日曾我の曲事傾城請狀を俳諧師にとりなして作るものなり。是等をもてもはら行はれしを思ふべし。江戸半太夫江戸堺町にて芝居興行の時も此淨瑠璃を語りしかば、今も此曲事を江戸節河東節には語り」とある。また元祿十四年七月正木屋九兵衛板の「傾城請狀」といふ三巻物の八文字屋風の浮世草紙には、京の巻には「團扇曾我けいせい請狀、宇治嘉太夫正本」大阪の巻には「百日曾我けいせい請狀、竹本義太夫正本」江戸の巻には「關東曾我けいせい請狀、林和宗太夫正本」とそれ／＼巻首に掲げて居るなど、三都を通じて持囃された作であつた事がわかる。

「百日曾我」は「團扇曾我」に比較すると第四段迄は辭句に多少の相違を見るのみであるが、第五段は書きかへてある。茲には原作たる「團扇曾我」を収めた。

校訂用原本は八行六十二丁本。

蟬せみ

丸まる

元祿十四年五月六日より竹本座上場。義太夫受領祝ひの淨瑠璃（近松傳參照）。

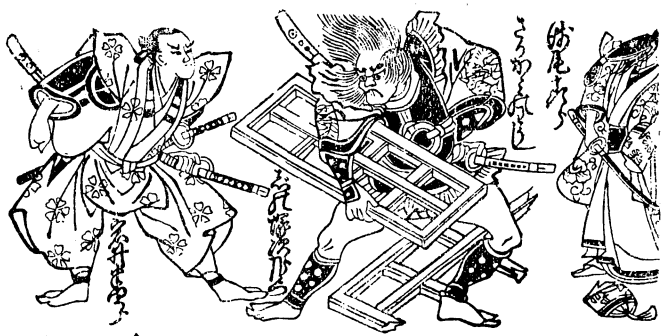
題材を謡曲「蟬丸」に取り、これに蟬丸を中心として其北の方、情人直姫及び芭蕉の前の三女性の戀争ひを取合せて想を構へた作で、元祿十一年に大阪の岩井半四郎座で興行された「蟬丸」の影響なども見えて居る。次に掲げた同座の繪番附第一段の北の方が枕を二つに切割る場面や第二段の道行・逢坂山の段等がその證である。

大筋をいへば、醍醐帝の第四皇子蟬丸が美男の上に琵琶の名手であつたので多くの婦女に思はれた爲に、その北の方や情人芭蕉の前等の怨念に祟られて失明し、滅罪生善の爲に逢坂山に捨てられた。蟬丸は玄上の琵琶を抱いて草庵に獨り自ら慰めて居たが、情人直姫が蟬丸の傳清貫と共に尋ね來て艱苦を共にした。のち蟬丸は佛力によつて再び兩眼開き、歸京して子孫繁昌するといふに終る。

第一段の北の方と芭蕉の前とが宇治の橋姫神社の前で愷氣講をする趣向は、加賀掾の正本「葵の上」（元祿四年の作か、その作者は近松ともいはれる）の貴船詣の條の翻案で、北の方が蛇身となる條は、作者の舊作「つれづれ草」（天和元年刊、加賀掾正本）の侍従が丑の時参りの條の踏襲で、謡曲「鐵輪」



行興座井岩年一十祿元



附 番 繪 「丸 蟬」

から出てゐる。また第五段の切「懐胎十月由來」の節事は、これまた近松の作とも推定される天和四年正月刊行の加賀掾の正本「甲子祭」の第五段の文を取つてこゝに嵌めたに過ぎぬ。

享保九年十月豊竹座新築の祝賀淨瑠璃として興行した「女蟬丸」(西澤一風・田中千柳合作)はこの曲の翻案で、蟬丸の代りにその妃直姬が失明する事になつてゐるが、これは純然たる反逆物となつて居て、作柄は遙に劣つてゐる。

校訂用原本八行五十九丁本。

最明寺殿百人上臈

元祿十六年三月四日より竹本座上場。作者五十一歳。

北條時頼の嗣子天女丸(時宗)を義經の再誕とし、これに義經含狀、佐々木先陣、逆鱗の遺恨等を取合せて想を構へたのが上巻である。最明寺時頼、禪定に入ると稱して政治視察の爲に諸國行脚の途に上る。弟の冠者時定が梶原の怨念に憑かれて、義經の再誕たる天女丸を敵視する源藤太經景と謀つて、天女丸を討つて政權を奪はうとして伊豆の三崎に據つたが、却つて天女丸及びその傳宇都宮友平、佐々木廣綱等に滅さるゝ迄を上巻とする。

下巻は謡曲「鉢の木」の翻案で、佐野源左衛門の代りにその妻をシテとして女鉢の木の趣向に改

め、結末「女勢揃へ」の場において、經世は叔父經景に横領された本領に安堵する事となる。題名は「女勢揃へ」の節事の章に因む事は言ふ迄もない。

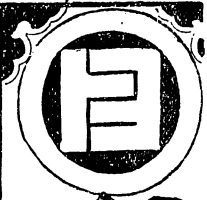
近松の作としては佳作とは評し難いかも知れないが、女鉢の木の趣向は享保十一年豊竹座で大當りを取つた「北條時頼記」(西澤一風・並木宗助・安田蛙文合作)を始めとして、後の戯曲や淨瑠璃に及した影響が大きい。また「南水漫遊」拾遺二の巻に

「近松氏の作多き中にも、元祿十六年末三月四日初日竹本座の操にて最明寺殿百人上臈といへる院本(後年豊竹座の操にて大當せし北條時頼記雪の段の原本是なり)おほけなくも靈元法皇觀覽ましく、其頃歌人の聞えある公卿を召させ給ひ、いづれも秀才なりといへども近松とやらんには劣れり、とて彼院本を取出し給ひ、最明寺が道行ぶりに蝶の翼のおしろいを草にこぼして、梢には鶴の霜毛をぬぎかくる雪は花より花多きと書けり、是なん圓機活法雪の部に鶴毛蝶粉といふ四字を出して書ける處、石曼卿が雪を詠せし詩に、蝶遺粉翼輕難拾、鶴墜霜毛散未轉、といふ此句を和語に移せしならずや、かゝる才智を以て和歌を詠じなげ秀逸數多有りぬべしと御感ならせ給ひけるとなん」

とあるので世に知られた淨瑠璃である。かたぐ採つて本巻に收める事としたのである。

校訂用原本八行五十五丁本、對校本十行三十丁本。

次に掲げた「北條時頼記」の番附は、延享三年十一月豊竹座興行の時のものである。



奕

豐竹越前守務
豐竹上野小掾

北條時頼記 五段續

有者の事... 北條時頼記 五段續



物産
豊竹上野小掾
豊竹清方
豊竹隆興
豊竹隆盛
豊竹隆俊
豊竹隆信
豊竹隆光
豊竹隆盛
豊竹隆俊
豊竹隆信
豊竹隆光



<p>二 線</p>	<p>豊 行</p>	<p>豊 行</p>	<p>二 行</p>
<p>豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾</p>	<p>豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾</p>	<p>豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾</p>	<p>豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾 豊行 上 野 少 掾</p>

人 形 芝 居 番 附

北條口述

康永

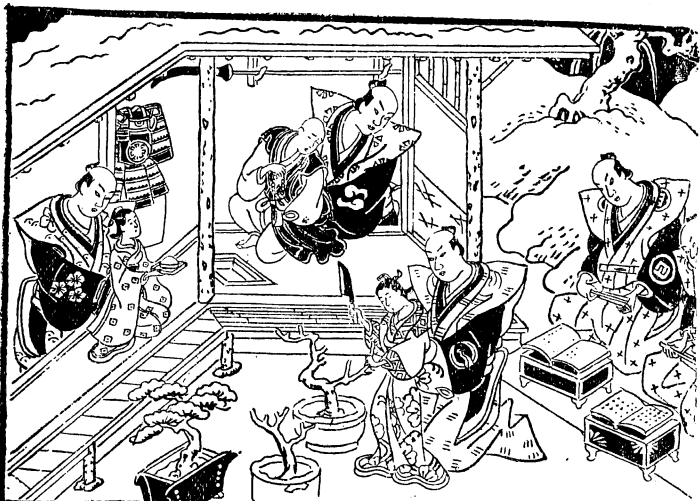
豊後朝方

流小所常快沙具類に為て私若者もせしきより今十余年芝形
相傳とわまりの事身にわまりた念川志く小奉持志のふもちや
終身共六十二歳に成候也はびり衆内道ちまを上野の少極と
おわくは世業成ゆづり私退居候は付久く歩あふみの町中候へ
る所流うをき候り候よりる言撰作は二篇一世代乃也なり
かちわ小水家今上野とさる事流いとあおひとし月入のてあ
師東あ吟小並より信志に中なる所具類はなれたれとて
をあの候小水家へ相傳とすなり今小水家のなどとれと上野の山笠
一世代花がこみ女ちりり乃木



おんんんんんん
小桑村より
い香月夜娘
若狭八十八
豊松三郎
若井九郎
若井小次郎
若井小次郎

木 の 鉢 女 上 同



信濃の國に
 三つと浮雲村
 娘ちりくさ娘
 中春まじん
 秋田城のせい
 女やう存まき
 大野の軍八
 ろ割御春次
 女やういくま
 いりしまつよ
 利根の帝尊運
 うまのてえん
 かんや
 唐登あし郎
 経世女わう
 いりとうはさ
 佐野徳久経世
 さの保友た

信濃の國に
 三つと浮雲村
 娘ちりくさ娘
 中春まじん
 秋田城のせい
 女やう存まき
 大野の軍八
 ろ割御春次
 女やういくま
 いりしまつよ
 利根の帝尊運
 うまのてえん
 かんや
 唐登あし郎
 経世女わう
 いりとうはさ
 佐野徳久経世
 さの保友た

信濃の國に
 三つと浮雲村
 娘ちりくさ娘
 中春まじん
 秋田城のせい
 女やう存まき
 大野の軍八
 ろ割御春次
 女やういくま
 いりしまつよ
 利根の帝尊運
 うまのてえん
 かんや
 唐登あし郎
 経世女わう
 いりとうはさ
 佐野徳久経世
 さの保友た

遣 出 語 出

會根崎心中

元祿十六年五月七日から「日本王代記」の切として竹本座に上場されたもので、我國近世戯曲史上に一線を劃すべき傑作であり、竹本座は空前の大當りを取つた淨瑠璃である。

大阪内本町の醬油屋平野屋久右衛門の手代徳兵衛、北の新天地天満屋のお初と深く契り、主人の妻の姪との結婚を頑強に拒絶するが爲に、絶對的に必要とする金子を悪友油屋九平次に詐取されたのみでなく、彼の爲に新地でさんぐ、誹謗されたのを憤り慨いて、お初と共に會根崎天神の森で情死の筋。

「心中大鑑（寶永元年刊）によれば、お初は京に生れて島原で育ち、後北の新天地へ下つたのだが、この廓には珍しい戀知りであつた。心中の動機は徳兵衛か忠右衛門の女房の姪と夫婦にさせられて江戸の支店へ遣られる事となり、またお初は豊後の客に身請されると定つた爲で心中は元祿十六年四月二十三日であるといふ。「外題年鑑」にもさうあるが、「攝陽隨筆」には四月七日の事としてある。「牟藝古雅志」所載の觀音巡りの口上書によれば、この淨瑠璃に作られる前に既に歌舞伎でも演ぜられて居るらしいが、すれば四月廿三日では少し間が無さすぎるやうに思はれる。

此曲が大好評であつたので、本年七月豊竹座の旗あげをした豊竹若太夫は其上演曲たる「心中涙の玉井」に此淨瑠璃の脚色を摸倣した。又翌年にはお初の朋輩であつた丸屋しげがお初の跡を追て獨心中をし、九十次はお初徳兵衛の靈魂に取殺される事を仕組んだ「遊女誠草」といふ淨瑠璃さへ出た。

のち竹本座で享保二年再興行の際、近松は自ら改修して徳兵衛の叔父平野屋久右衛門を情義に富む人物として描き、又悪漢九平次の奸計が露顯して懲しめられるやうにしてあるが、之は近松の心中物の内容・思想の展開及び作者自身の人格の圓熟を知る上には大いに注目を要する點である。

此改修された「曾根崎心中」の道行の題名を「道行ちしごの霜」と變へ、最後の一枚を改めて、お初は死し徳兵衛は追跡者に助けられる仕組としたのが、享保十八年二月に豊竹座に上場された「お初天神記」である。

尙「曾根崎心中」の改作翻案の淨瑠璃としては、お初徳兵衛の心中にお半長右衛門の桂川心中を取合せた「曾根崎模様」(寶曆十一年五月豊竹座、若竹笛射・淺田一鳥・中邑阿契等作)徳兵衛お初おしげの三角關係を主想とした「よみ讀三巴」(明和五年七月竹本座、近松半二等作)河堀口の段・教興寺村の段を設けて技巧を弄し筋を複雑にした「往古曾根崎村噂」(安永七年九月竹本染太夫座、近松半二等作)等がある。併しいづれも原作に比して文章は言ふ迄もなく、筋にも無理が多く、詩趣も豊かでなく、人物の描寫などの點でも見劣すること雲泥の差である。歌舞伎の方にもこれを材題としたものは澤山あるが今一々擧げるの煩に堪へない。

此曲の道行の名文たる事は言ふ迄もないが、荻生徂徠が讀んで「残る一つが今生の鐘の響の聞き收め」に到り、「近松の妙技にあり」と案を拍つて激賞したとか、或は近松が「……一足づつに消えて行く」とまゝ書いたかそのあとを續け煩うて居ると、折柄來合せた伊勢の俳人岩田涼菟が「夢の

夢こそはかなけれ」とでもやり給へと助言したといふ逸話などによつて殊に名高くなつてゐる。
八行廿六丁本によつて校訂した。

源五兵衛 おまん 薩 さつ 摩 ま 歌 うた

寶永元年正月十五月初日にて竹木座に「悦えが賀が樂ら平へい太た」の切として上場したものである。近松世話淨瑠璃廿四篇中第二番目の作であるが、前年の「曾根崎心中」とは異り古い巷説俗謡をもととして想を構へた作である。

此曲の主人公たるおまん源五兵衛の事實については西澤一風の「傳でん奇き作さ書しよ」後集の下、「中興世話早見年代記」の條に寛文三年さつま源五兵衛お萬心中と明記してあるが、他に傍證を見出し得ない。尤も近松の「薩摩歌」の發端にも「はやり小唄も時につれ時の昔と何處へいく、寛文年の頃か」とあるのによれば、作者自身も寛文頃の事として取扱つたもののやうである。

それに「源五兵衛どこへいく」の流行唄にヒントを得て居る事も件の引用句で推測し得られるのみならず、作中にもそれらしい箇所は見出せるし、第一に外題がそれを告げて居る。本曲と同材題の西鶴の「五人女」の巻五の「源五兵衛どこへ行く、さつまの山へ、鞘が三文下緒が一文……」や、「薩摩歌」の中の「源五兵衛どこへ往きやる、薩摩の山へ、あとはおまんが涙の海よ……」などが即

ちそれであらう。又寶永元年刊行の「松の落葉」巻四の源五兵衛踊の唄に

二上り高い山から谷底見れば、薩摩源五兵衛は目に立つ男のほほんにほ、しやれた髪つき茶筌髪、
寝て又起きても茶筌髪、ずんどくぼんだ塗笠、おまんはどこへ、播磨の明石へ蛤ふみにく、は
まぐりくくふみに、てぐりくく舟にのこの舟に乗せた源五兵衛、きりくと廻つてのぞん
だ播磨の明石へ、蛤ふみにくはまぐりくくふみにてぐりくく舟にのこの舟に乗せた源
五兵衛、一萬八千寶藏えいくやえいく代の榮え。

とある。かういふ流行の機を利用して、これを材題として劇化を試みたのであらう。

鹿兒島の侍菱川源五兵衛が寺の後住となるべく修行中、同地琉球屋の娘おまんと契つた事が顯れ
て國を出奔し、京都に出て熊本の侍笹野三五兵衛の許嫁小萬の邸に仲間奉公し、小萬に其蚊帳の中
へ引込まれるのが動機で、小萬が年頃こがれて居た三五兵衛は女裝して彼女の侍女林と名乗つて朝
夕側に居た事が明かとなり、源五兵衛は三五兵衛が年來尋ねる親の敵の所在を告げて去る。源五兵
衛は歸國しておまんと同棲を望んだが繼母に妨げらるゝを怒つてこれを斬る、其時誤つておまんを
も傷つけ、己も亦割腹したが、折柄尋ねて來た三五兵衛夫婦に救はれるといふ筋である。

この曲の「源五兵衛おまん夢分船」の一章は、俗謡を大膽に連続して豊かな抒情味を漂はせ、
標渺夢幻の詩趣、汲めども盡きざるものがある。

此淨瑠璃の改作に「薩摩歌妓鑑」がある。寶曆七年七月竹本座上場で、元文二年薩摩の侍早田八

右衛門が北の新地會根崎三丁目大和屋十兵衛夫婦と櫻風呂抱へ菊野と下女二人を殺害した事件を取合せたものである。又安永六年五月北堀江座上場の「置土産今織上布」は「心中天網島」と前記の五人

斬とを撮合したものであり、天明八年五月竹本染太夫座の「國言詢音頭」は「妓鑑」の改作である。

一方歌舞伎の方面にも、此五人斬事件が取材されて、まづ「初嵐元文嘶」「烏廻戯聞書」等になり、並木五瓶の「五大力戀緘」(寛政六年作)に至つて小まん源五兵衛は原作「薩摩歌」のそれとは全く面目を異にする人物に作りかへられた。爾來小まん源五兵衛といへば直にこの「五大力」を連想される程になつて了つた。

加賀掾の正本に同外題のものがあるが、やはり此作を轉用したので、諸國鍵印の一章を省いた上に、語句に多少の改修を加へてある。

校訂用原本は八行五十六丁本。

雪女五枚羽子板

「國性爺合戦」「曾我會稽山」と共に近松時代物の三傑作と稱へられたものである。明和板「外題年鑑」には寶永二年七月十四日より竹本座上場となつてゐるが、作中に正月の景物行事を盛んに用ひて新年氣分が濃厚であるので、盆興行とは受取り難い點、及び竹本座は此頃筑後掾が座本引退の

ため休座中ではたかつたらうかと推測される點などから考へて、著作上場年代に疑問の餘地があるが、未だ確證を得ない。

赤松滿祐が將軍足利義教を其邸に招じて「鶉飼」の能上覽の場に於て弑した事件を題材とし、名を赤沼幸滿と變へ、將軍義教を節分の夜わが館に招じ酒宴を催してもりつぶした上で弑さうとしたが、將軍は足利家の寶篋小水龍の奇瑞によつて危難を救はれ、幸滿は後に管領斯波義將・細川勝秀等に滅されるといふ筋であるが、斯波も細川も一時は將軍の勦氣を蒙つて世を忍んで機會を待つ。其間に義將の臣藤内太郎其弟二郎・三郎・四郎・五郎の五人の同胞をして各得意とする笛・鼓・太鼓・棒等の藝を以て働かしめ、又中川・小阿彌・玉椿・琵琶前・をだまきといふ境遇と性情との異なる女性の活動を配し、それに「藤内樂車」の所作を始めとして松囃し・厄拂ひ・追羽子・女の掣入、「もんさく系圖」等の趣向を取入れて日先の變化を圖つてゐる。時代物の三傑作としては異論もあらうが名作には相違ない。

外題名は、藤内太郎の妻中川が赤松邸で雪中に凍死させられ、其亡靈が義將と夫とに赤松の謀叛を告げる事、木阿彌の女玉椿が羽子をつく事、藤内五人の兄弟が一藝に秀でたこと等に因んで付けたものであらう。

大序の「樂車打つて囃した……」は當時の名優嵐三右衛門の「藤内だんじり出端」の歌から取つたもので、藤内太郎は嵐三右衛門をモデルとして、その舞臺姿を人形で見せようとしたのだと言はれる。次に「松の落葉」卷三に載つてゐる三右衛門の六法だんじりの歌と、彼の舞臺姿を畫いた歌

舞伎の番附繪とを掲げて參考に供する。

藤内だんじり出端

嵐 三右衛門

二上り藤内次郎殿わいの、笛吹のや役で、紫竹漢竹の、やつこのほこりをさ、さつくとも拂うての、とうらいくの、笛人の物はとらいの我物はやらいのと、合吹いたるは、さつても吹いた笛吹と、どつとほめて通した。だんじり打つて噺した、だんじり打つた見さいな。藤内三郎殿は小鼓の名人で、あかふの胴に加賀革くれ、紅の調を、千鳥かけにかけさせ、ちよつち、ちふつぽく、たつぽくつたつたくくくく合打つたるは、さつても打つた小鼓と、わつとほめ通した。樂車打つた見さいな、だんじり打つた見さいな。藤内四郎殿わいの、大鼓の役で、しつたんに、しつたんくくく、しつたん作るおん百姓、明年は八たんぢや、三明年は十六たんく、丹波の國のお百姓と、合打つたるは白癩上の町下の町、どつとほめて通した。藤内五郎殿わいな、太鼓打の役で、大まいの太鼓を、あそこらもとに置かせて、金の撥を手に持ち、つくくくくつてんくくてれつくには、づんでんどん、これつくく、つてんく、とんからつとんとうつほれた。なるかならぬか戀の中の町。なかのく中の町。なかのく中の町を、通りたうはなけれど、生蛸つかんだ天窓を見たか、熊野小比丘尼が、ちとくわんくくくわんともなるは、夜明けの鐘はつんくつらいか、づんでんとうから、櫓太鼓の音に寄り来る。

校訂用原本は八行六十丁本。



名残の盆

上大志よ言んまゝにたぬぬ
 中やとけぬを梅川女さう
 下ふんぢり六法教南太郎
 わん所
 を下め
 い名板
 尻三ちろ



門 衛 右 三 嵐

用明天皇職人鑑

竹田出雲が竹本筑後掾に代つて竹本座の座本となつて始めての興行に用ひられた淨瑠璃として有名である。「外題年鑑」に寶永二年三月上場とあるが、之は信じられない。「操年代記」の出雲が筑後掾を説いて竹本座の座本となつた條に「竹田氏參會し、未だ老木といふにもあらず、今町中賞美する所に、思ひも寄らぬ引込思案、二三年勤めて給はらば、拙者座本仕り、萬事の世話を引請け、貴殿内證入用銀御用次第つゞけ不自由させまじと、同行衆を以て頼みしかば、下地は好きなり御意は重し、いか様とも詞を極め、歪すんで其暮顔見世淨瑠璃といふを始め、用明天皇職人鑑、作者近松門左衛門を抱へ、太夫竹本筑後掾、座本竹田出雲と看板を並べ三段目の出語り」とある。此文中の「其暮」といふのは寶永二年の暮である。歌舞伎の顔見世と同じく、此作は寛永二年の十一月興行であつた。

尙これを裏書する有力な傍證は「心中二枚繪草紙」の發端の「すでに今年の酉もたち、戊の顔見世……」の句であつて、これは道頓堀竹本座の顔見世芝居の繁昌を寫す場面の發端であるが、その芝居が「用明天皇職人鑑」たる事は文中に歴然たる證句があるから、この曲は戊の顔見世興行、即ち寶永二酉年十一月興行と斷すべきである。この點は「心中二枚繪草紙」の上卷を解釋する上にも極めて重要な事項である。(心中二枚繪草紙解題參照)

敏達天皇の皇弟花人親王、後の用明天皇は佛法を信じ伽藍を建立し、天下の諸職人に官位を與へ給ふ。異母兄山彥皇子は外道に溺れ、魔法を以てこれに對抗し、親王の情人たる豊後の眞野長者の女玉世姫を奪はんとし、爲に親王は流離の苦を嘗め給ひ佐渡に漂着して五位介諸岩もろいはに助けられる。それから伴はれて播州高砂浦に於て梵鐘引上ることに出會し、其才力を認められて眞野長者に抱へられ草刈山路となつて再び玉世姫と忍びくゞに逢ふことが出来たが、姫の繼母の爲に苦められ、姫は毒殺される事となつたが、變毒爲藥の佛法の奇瑞により、聖徳太子御誕生あり、惡魔外道を滅すといふ筋。

二段目佐渡島兵藤太内の段は、後世の「太功記」尼ヶ崎の段を聯想させるやうな技巧的の場面であり、三段目尾上の鐘供養の場は謠曲「道成寺」の翻案である事は言ふ迄もなく、四段目には山路の傳説が取入れられて居る。又檢非違使勝舟が鹿島の事觸ことぶれとなつて長者の屋敷へ入込む趣向は、當時年末から年始に門々に立つた鹿島の事觸を例の才筆で描き出したのであるが、後年の歌舞伎劇の事觸、大神樂獅子、鳥さしなどの舞踊劇の藍本となつてゐる。其他、出雲が座本となつた爲に竹田芝居のからくりの舞臺技巧が應用されて居る事は、本書に挿入した表紙見返の繪によつても十分に想像する事が出来る。

此時の座本出雲は二代目清定、即ち後の忠臣藏などの作者たる出雲といふ事になつて居るが、彼は此時まだ漸く十五歳であるから、父の出雲であると見るべきである。

底本は八行七十三丁本、對校本は十一行四十一丁本。

心中二枚繪草紙

寶永三年三月廿七日から「本領曾我」の切として竹本座の勾欄にかけられた作。時に五十四歳。

寶永二年十一月十六日、大阪北の新地天満屋の抱へお鳥と長柄村の百姓介右衛門の養子市郎右衛門と牒し合せて、女は天満屋の二階、男は長柄堤に於て殆んど同時に情死した事を仕組んだものである。敵役として市郎右衛門の義弟善次郎といふ無頼漢を點出し、借金に窮した擧句父の預つて居た報恩講金を横領して其罪を市郎右衛門に轉嫁する。市郎右衛門は養父の恩に報いる一端にも冤罪を身に引受ける、こゝに心中の動機を設けてある。そして其健氣にも亦あはれな心情をお鳥が酒の酔に乗じて述べるのを聞いて善次郎は改悔し、兄を助けようとしたが及ばなかつた、彼は「せめて兄の報恩と、恥も身體も衣裳につゝみ」負うて一先づ立退くのである。さてこそ世上に此男死んだ風説死なぬ沙汰、生死二枚の繪草紙に戀路の回向を受けるので、題して「心中二枚繪草紙」といふ。

上の巻は「用明天皇職人鑑」の解題で述べたやうに、お鳥が心中する少し前に明石の貞に伴はれ道頓堀の竹本座の芝居を見ての戻りがけ、今日芝居で聞いた山路の道行を語るのであるが、之は職人鑑が寶永二年十一月の興行である事が明かになつて初めて生きて來る場面で、「竹の紋つく道行」とか又は「佛金色の身上りと聞く外題に引かれ」といふ從來難解と云れた句も容易に解釋されるので

ある。(本文の用明天皇職人鑑の表紙題簽参照)のみならず如何に作者が芝居と事實とを虚實皮膜の態度で結びつけて見物の興味を惹くに苦心したか、又は作と作との聯絡に意を注いだかも分ると思ふ。舞臺上の技巧としては「血死期の道行」で市郎右衛門とお島のまぼろしとが連添ふ處もよいが、それよりは下の卷の天満屋の二階の窓と下とで柄付の鏡と扇の金物とを星の光にきらめかし合ふ場面の方が勝れて居る。こゝが「國性爺合戦」の獅子が城樓門の場で錦祥女が父の姿を鏡に映す趣向となり、更に轉じて忠臣藏七段目のおかるののべ鏡の技巧と展開する原據であらう。

校訂用原本は八行三十三丁本。

兼好法師物見車

寶永三年五月五日より竹本座上場。

高師直に懸想された後宇多院の皇女卿の宮は、日頃お氣に入りの吉田兼好に其處置を相談される。兼好は侍従といふ女房をして師直の心を轉じさせようとして鹽冶高貞の室かほよの美貌を彼に説かせる。すると師直は侍従に媒介を強請し、侍従がそれを果さないのを怒つてこれを殺し、また高貞を討つてかほよを奪はうとした。

侍従の父又五郎は娘の非業の死を悲しんで發狂し、徒然草起稿中の兼好の庵に来て、高貞の室が

家老八幡六郎に助けられて避難したのに落合ふ。こゝへ師直の侍大將小林民部が追撃して来る。兼好の法力で正氣に復した又五郎は、八幡を助け民部を討つて娘の仇を報じるといふ筋。上・中二段物。初期の作「つれづれ草」の改作で、「太平記」の師直が鹽冶の妻に懸想する條を素材として居る。題名は吉田兼好が卿の宮の爲に加茂の附近で、物見車の傍に立つて都の名所を説明する條に因んでつけたのである。

八行四十七丁本を以て校訂した。

碁盤太平記

寶永三年六月一日から「兼好法師物見車」の跡追として出したもの。

高貞の家老八幡六郎は大星由良之助と名を改め、一子力彌と共に山科に閑居し窃かに同居の士と氣脈を通じて復讐の機を待つたが、いよく機熟して父子東下しようとする。由良之助の母と妻とは自刃して二人を激勵する。大星は鎌倉に下着して同志と共に師直の邸に討入つて敵の首級をあげ、光明寺の亡君に手向けて一同割腹するといふに終る。

山科閑居の場で大星父子が、潮死の下僕岡平實は寺岡平右衛門から師直邸内の様子を聞きつゝ碁盤に黑白の石を並べ其委曲を領得する條に、世界が太平記であるのを取合せて題名としたのである。

赤穂義士の復讐を仕組んだ淨瑠璃の嚆矢であつて、「鹽治殿浪人、初めの名は八幡六郎、今は大星由良之介殿」といふ句を以て「兼好法師物見車」に連絡をつけ、二篇合せて大きく三段組織となつてゐる。兩作の間にはそれ程の深い關係を認め難いといふ人もあるが、段取において、又その世界や重要人物の共通點において、隱微の間に關係が保たれて居る、のみならず物見車の正本の表紙見返しの豫告（本書に挿入して置いた）などによつて考へれば、相當に密接な關係があると思はれるが、それが露骨でないのは事件後まだ五年目でもあり、前に江戸で曾我の世界に仕組んで禁止された例もあるから、座本や作者の頭には官權に對する考慮もあつて、初めから興行政策上切離して跡追とする意圖があつたと見る方が自然ではなからうか。

義士淨瑠璃は、この曲を始めとして、紀海音の「鬼鹿毛無佐志燈」〔正徳三年十二月〕から並木宗輔の「忠臣金短冊」〔享保十八年十月〕と次第に技巧的になり「假名手本忠臣藏」に至つて是等の諸作の長を採つて大成されるのであるが、世界も主要人物の名も、また山科閑居の場も皆この「碁盤太平記」に負ふものである。

又「國性爺」の獅子が城の段の貞烈な和藤内の母は、この曲の大星の母と同型で僅にその名を變へたに過ぎない程に類似してゐる。

八行三十三丁本によつて校訂した。



忠臣金短冊



繪 盡 「 約 里 繪 繪 」

興兵衛
おかめ 卯月の紅葉

大阪北久太郎町心齋橋の道具屋長兵衛の娘お龜と養子興兵衛との夫婦仲は至極睦しかつたが、長兵衛の妾いまといふのがあつて、自分の弟傳三郎をして家を繼がせようとする下心から、二人で興兵衛を虐待し、長兵衛にも悪口するので、興兵衛は自分の境遇を果敢なみ家にも落着かず、お龜は又これを悲しんで居たが、傳三郎の爲にさんぐ侮辱されて長兵衛の怒を買つたので、五月十七日の夜梅田堤で情死を企て、女は死し、男は助かるといふ筋。時に男は二十一歳女は十五歳。

外題年鑑(明和板)によればこの曲は寶永四年四月廿一日より竹本座で「今川了俊」の切に出し、越えて同年六月一日「根元曾我」の切に「卯月の潤色」が演ぜられたとある。併しこれは信じられない。情死未遂の興兵衛がお龜の跡を追つたのは三十五日だとも七々日の忌日だとも傳へられるが、實説が朦朧として居るから何ともいへないものの、假りにそのいづれかであるとしても「卯月の紅葉」と「卯月の潤色」との實演の距りは少くとも約十ヶ月以上なくては「潤色」の方の「去年こなさまの生口を寄せてから近付になり初め」とか「去年一所に死ぬるなら」とか「今日は卯月十七日、此命日の明けぬ間に、今宵の中に自害して來月のむかはりは、未來で一所に附添はん」とかいふ句や、助給が四月十七日に自殺する仕組が生きて來ないと思ふ。

扱て「卯月の紅葉」の著作上場年代であるが、それを考定すべき手がかりが幸に作中にある。上

の巻で天王寺の黒格子から出たお龜が與兵衛に逢つて口説く際に「昨日はわしが氣晴らしとて、父様と半四郎の心中狂言見たれども、餘の事は耳へも入らず半九郎お染が最期のせりふ、此方の胸に皆こたへ、……四郎五郎が不心中面白いとて笑へども私や一日泣いてゐた」とある箇所で、之は寶永三年の夏、岩井半四郎座興行の「鳥邊山心中」を見に行つて、お染半九郎に同感し、茶屋女に強ひられていや／＼心中に出た男に扮した中村四郎五郎の面白い仕打は目に入らなかつたといふのである（四郎五郎が好評であつた事は寶永五年の「役者稽古三味線」に、「去々々鳥邊山中心いたされ好評」とあるのて知れる）是は即ち此作が寶永三年夏の興行であつた事を證明するに足るものであると思ふ。自然「卯月の潤色」は寶永四年の興行となるが、作中に江州石山寺の開帳へ參詣して歸つた助給の同宿の坊主の言葉に「石山の繁昌京大阪が打ちあける」とあるのは、寶永四年三月七日から六月十八日まで行はれた石山寺開帳を當込んだもので、寶永四年の著作上場たる事を裏書するものである。故に私は「卯月の紅葉」を寶永三年六月興行、「卯月の潤色」を寶永四年四月の興行と考定する。若し強ひて外願年鑑に繰入れれば寶永三年六月朔日よりの「碁盤太平記」の切の「跡追一段物」の場と、寶永四年四月廿一日よりの「今川了俊」の切とに据ゑれば矛盾が無く、且作中の當込文句も生きて來ると思ふ。八行三十丁本で校訂した。

堀 河 波 鼓

寶永四年二月十五日から「吉野忠信」の切として竹本座上場。時に作者五十五歳。

近松三姦通曲の一として有名なもの。因幡の藩士小倉彦九郎が主君に従つて江戸詰の留守中に、妻のお種が亂酔して養子文六の鼓の師匠宮地源右衛門と思はずも不義の枕を交す。豫てお種に戀慕してうるさく附纏つた磯邊床右衛門に證據を握られた上に落中に言ひ觸らされた。彦九郎が歸國の日諸方より眞苧を送つてお種の姦通を諷し、お種の妹お藤の苦心もその甲斐なく、お種は妊娠四箇月の胸に九寸五分を貫き夫に向つて「いとしき我が夫を、袖にしての不義ではなし夢見たやうな身の上の、間に憎い奴もあれと言へば卑怯の未練の死」といひつゝ潔よく夫の手にかかる。彦九郎は縁者と共に京下立賣堀川の源右衛門の家を襲つて首尾よく女敵を討つ。

實説は寶永三年六月七日の事(「月堂見聞集」)で、此事件を綴つた寶永三年八月刊行の錦文流の浮世草紙「熊谷女綱笠」によつた跡があるが、其姦通の動機やお種の性格は近松の虚實皮臑の藝術觀に基づいて美化され想化されて居ると見るべきであらう。「堀江川波鼓」といふのは外題替である。

此曲は八行本の原本全部を覆刻して之を載せ、其上欄に校訂文を掲げた。原本の體裁と、校訂文との關係を示す實例にもと思つてである。

卯う月つきの潤うる色あけ

「卯月の紅葉」の後篇である。著作年代については前の「卯月の紅葉」の條に述べて置いた。

「卯月の紅葉」の末期の道行を、其結末數行を改めて上巻とし、中・下兩卷を新作したのである。お龜の五七日に其伯母は巫女の口寄を聞いて縁者と共にすゝめて與兵衛を出家させた。與兵衛は助給と改め大和の平群谷へぐりたの庵室に住んでお龜の菩提を弔つた。お龜の死んだ翌年四月十七日に助給はお龜の亡靈に逢ひ、來月の一週忌は冥途で一緒に連添はうと決心し、書置を残して伯母の情の白縮緬の紵帯をお龜の位牌と自分の左の手とに絡みつけて剃刀で自害して女房の跡を追つた。

お龜のまぼろしが現れて助給と打解けた態度で親しげに物語り、いそぐと立働く場面は文情秀麗にして恍惚夢幻の情趣に富んで居る。

「脚色餘録」に此淨瑠璃を竹田出雲の作としてあるのは従ひ難い。
八行廿九丁本によつて校訂した。

心しん 中ちゆう 重かさね 井み 筒づつ

大阪六軒町の色茶屋重井筒の抱へ妓おふさと重井筒の主人の弟で上町萬年町の紺屋に聲入りした徳兵衛とは深く契りを交して居た。京なるおふさの父は彼女の身を抵當として他人の借金の受人に立つて居たが、いよく其金を融通しなければおふさは京へ呼戻されて入牢せねばならぬ日が切迫

した。徳兵衛は金の才覚に惱んだ奥女房お辰の判を盗用して金を借りて一時の急を救はうとしたが、お辰の貞實な心に動してそれを決行し兼ねる、一方重井筒の主人夫婦は二人を逢はせまいとする。彼等は絶望の極高津大佛殿勸進所に於て情死するのである。

中巻、重井筒の女房がおふさを意見の場の趣向は「八重霞浪花濱荻」(寛延二年三月、通稱おその六三)のかしく新屋敷の段に轉用されてゐる。

「道善重井筒」は此淨瑠璃の外題替であつて、延享三年五月竹本座で竹本筑屋掾三十三回忌道善の出し物として上場した時に改題したのである。

此淨瑠璃の著作上場年代については「外題年鑑」(明和板)に寶永元年四月十六日から竹本座上場とあるが、二人の情死が寶永元年三月廿九日といふ説(關根只誠、戲場年表)と寶永元年十二月十日といふ説(濱松歌國、南水漫遊)とがあるのに關聯して「外題年鑑」の上演日附に對しても疑を抱いた人もあつたが、未だ之に代る定説のあるを聞かない。

併し私は此作の道行文中に綴込まれて居る道頓堀の「七つの芝居」と重井筒のお島の心中を手がかりにして寶永四年末の作と考定する。今其理由を簡単に述べる。道行文中で「名残盡きせぬ濱側の、こゝは竹田か……我を紺屋の片岡に、何とか思ひ染川は……包む袂の飛驒掾……こぞのお島の心中の、その井筒屋に我が今、重井筒と、篠塚に、いはれ岩井の半四郎、憂ひせりふのあやめぐさ、……西に嵐の吹き晴れて……いとと思ひに、くれ竹の、節を習ひし淨瑠璃も……」とある中、圈點

を附けた處は濱側の竹田のからくり芝居と片岡仁左衛門座と手妻人形の山本飛騨掾座と篠塚次郎右衛門座と岩井半四郎座と嵐三右衛門座と竹本座とを示すのである。そして是等の人形や歌舞伎芝居の櫓とその座本とは現實のものを取入れて見物の興味を惹かうとした作者の常套手段であつたに相違ない。處で、竹田・出羽・竹木の三座は此頃には引續いて興行されて格別の異動もなかつたが、歌舞伎の四座の座本は交替が頻繁であつた。こゝが手がかりになるのである。今假に「外題年鑑」の説に従つて寶永元年の興行とすれば、時の道頓堀歌舞伎四座の座本は松本名左衛門・岩井半四郎・竹島幸十郎・片岡仁左衛門でなければならぬ(役者舞扇子による)これでは近松の切角の文は生きて來ない。では前の道行文に綴込まれた四人が座本となつた年があるかといふに、それはある、寶永四年と同五年とが即ちそれである。(役者友吟味・役者稽古三味線による)すると此兩年のうちでなければならぬが、役者の動靜から見ると、芳澤あやめが岩井半四郎座に、染川十郎兵衛が片岡座に勤めたのは、寶永四年十一月から寶永五年にかけてである。さうなると前の道行文の座本當込は、寶永四年末から五年に互る範圍に限定される事となる。尙此推斷を裏書すべきは「こぞのお島の心中」である。寶永四年の序文のある「本朝濱千鳥」の卷四に、重井筒のお島と新八とが生玉で心中した事が出て居る。そして二人の心中は正月十六日とあるが、序文から考へて、この心中は寶永四年か三年の事であると言ひ得られる。かういふ考證が成立せば、結局作中に年末に關する敘事の多い點から見て、寶永四年末の著作上演と考定するのが最も當を得たものであらうと信ずる。

一、^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十} ^{二十一} ^{二十二} ^{二十三} ^{二十四} ^{二十五} ^{二十六} ^{二十七} ^{二十八} ^{二十九} ^{三十} ^{三十一} ^{三十二} ^{三十三} ^{三十四} ^{三十五} ^{三十六} ^{三十七} ^{三十八} ^{三十九} ^{四十} ^{四十一} ^{四十二} ^{四十三} ^{四十四} ^{四十五} ^{四十六} ^{四十七} ^{四十八} ^{四十九} ^{五十} ^{五十一} ^{五十二} ^{五十三} ^{五十四} ^{五十五} ^{五十六} ^{五十七} ^{五十八} ^{五十九} ^{六十} ^{六十一} ^{六十二} ^{六十三} ^{六十四} ^{六十五} ^{六十六} ^{六十七} ^{六十八} ^{六十九} ^{七十} ^{七十一} ^{七十二} ^{七十三} ^{七十四} ^{七十五} ^{七十六} ^{七十七} ^{七十八} ^{七十九} ^{八十} ^{八十一} ^{八十二} ^{八十三} ^{八十四} ^{八十五} ^{八十六} ^{八十七} ^{八十八} ^{八十九} ^{九十} ^{九十一} ^{九十二} ^{九十三} ^{九十四} ^{九十五} ^{九十六} ^{九十七} ^{九十八} ^{九十九} ^{一百}

八行三十二丁本を底本として、八行三十丁本と對校した。

傾城反魂香

敦賀で名妓遠山とうたはれたが戀ゆゑ賣られて奈良伏見と流轉し、遂に京六條三筋町で舞鶴屋の清手みやとして名をあげた土佐將監光信の女お光の魂魄が、其戀人狩野四郎二郎元信と契る顛末を主想とし、これに江州高島の城主六角家のお家騒動に伴ふ不破名古屋の鞆當、狩野元信吃の又平兩人の描いた名畫の奇蹟等を取合せて脚色したもので、時代物と世話物との中間に立つやうな作柄で、近松の作中出色の雄篇である。故饗庭篁村翁は「巢林子撰註」の解題中で本曲に次のやうに言つてゐる。

此傾城反魂香は狩野古法眼元信が土佐光信の掣となり土佐氏について繪所の預となりし事實を本とし、吃の又平が天津繪のことを交へ、遠山が死して後姿を現はしてうつゝに熊野參りするを反魂香の故事にあてて外題とせり。これに名古屋山三不破伴左衛門の二人を出し、三國の歌川敦賀の遠山とて越前に名高かりし兩人のうちの遠山をも光信が子として出したれば人物はよく揃ひ、作も亦妙をきはめたり。元信越前守に敘任し越前法眼とも號したれば、其縁に取りて先づ越前に到りて遠山に出會ひてより事起るは順序あり。元信厄に迫りて虎を描けば眞虎と現じて其難を救ひ、又平死に臨んで形を模せば石面に徹りて苗字を許さる。又平の描ける天津繪脱け出て敵を防げば、元

信の筆の襖の熊野山遠山と手を引きて登るべし。吃の女房に早口あり廊のやり手に氣轉者あり、
佐々木の屋形揚屋の座敷、大津街道三筋町の大門口、事も人も所もよし、巢林子傑作中の傑作なり。

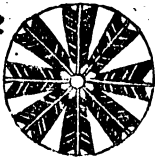
肯綮に中つた評である。上卷切將監館の段が今日行はれる「吃又」の原作たる事は言ふ迄もなく、
紀海音は此趣向を借りて「鬼鹿毛無佐志鏡」(正徳三年十二月)の第一段の切で中間與四郎を吃に仕立
てて居るし、近松自身も後に「信州川中島合戦」の跡虎配膳の場で勘助の妻お勝を吃として働かせて
居る。中卷三筋町大門口の場合は、歌舞伎劇の「鞘當」の轉化たるは言ふ迄もないが、上卷高島館の虎
の段は、後の「祇園祭禮信仰記」(寶曆七年十二月)の四段口切雪姫爪先鼠の原據となつたものと思ふ。

享保十七年五月豊竹座上場の「今様傾城反魂香」は本曲の初めに狩野四郎二郎が武隈の松を畫く
いはれを大序として五枚書き足し、下卷を省いて其餘を五段に分けたまでの物である。延享元年十二
月豊竹座興行の「遊君衣紋鑑」(爲永太郎兵衛等作)も亦改作の一つであるが、吃の又平を元信の養子小
四郎重信の舅とし、六角家の若君左京之助と遊女高尾とのいきさつを取合せて趣向を立ててあるが、
作柄は原作より遙に劣る。之に較べれば寶曆二年三月竹木座上場の「名筆傾城鑑」(吉田冠子等作)の
方が遙に原作を尊重して居る。併し後の作者が筆を加へたものは、いづれも原作には及ばない。

加賀掾の正本にも「傾城反魂香」がある。これも改修の一つであるが、原作の下卷を省き、中卷
の四郎二郎閑居の場以下を下卷として、その下卷は尤も餘程省略して居るが、他は原作と同じであ
る。宮古路豊後掾に「三熊野かけらふ姿」があり、又富本節の「反魂香名殘錦畫」(安永六年九月中村座

津阪

初瀬川同表



津阪の初瀬川

大正 久住田又七
小田中作平
大田市左衛門
中村俊次郎

市川八百藏
中村のへい

狂言 増山金八
作者 木村園治

都座



常盤津左大夫
常盤津政大夫
同 若太夫

三強岸澤吉太郎
上調向 市曉

正本 高砂町
いさかおの
板元 南新道

紙表「獄間浅櫻初」

上場、四郎二郎嵐三五郎、遠山中村富十郎、常磐津節の「初櫻淺間嶽」(寛政九年三月都座上場、遠山中村のしほ、元信市川八百藏)、もこれから出て、歌舞伎の所作事地として語られて共に好評を博した。

七行八十四丁本を以て校訂した。

高野山 しん 心 さむう 中 まん 萬 ねん 年 くさ 草
女人堂

寶永五年四月十六日から竹本座で「酒吞童子枕言葉」の切に出したもの。作者五十六歳。

高野山吉祥院の寺小姓成田条之助は、紙谷の宿雜賀屋の娘お梅と契り、折を得て寺を出でようと思望んで居たので、お梅の計らひで播磨なる条之助の父より迎ひの飛脚と偽つて暇の手紙を法印に届けさせようとしたのに、条之助に渡すべき手紙と入違つて居た爲に、祕密が暴露して条之助は山を追はれた。破戒の咎によつて彼が下山する時全山震動し雷雨物凄じく荒れ狂ふ。条之助はお梅に逢ひ、二階に忍ぶ。この晩お梅は父に強ひられて、京烏丸の美濃屋作右衛門との婚姻の盃を交さねばならぬ破目となつてゐる。お梅の母の心づかひと苦肉の策とのお陰で、二人は危い場を遁れ出で、女人堂で國許から尋ね上つた姉に条之助は餘所ながら此世の暇乞をして情死する。題名は条之助の姉が高野山に特生する萬年草を採つて水に浸して、弟の安否を下ふ條に因んでつけたのである。

二人の最期に及んで、心中物によく用ひられる念佛や題目を出さずに、眞言宗の經文を利かせた

作者の働きは昔から稱揚されて居る。また高野山の當時に於ける僧侶の生活風習、特に男色の行はれた模様などもよく描かれて居るが、全篇の眼目は中巻である。お梅の母の心づかひ、石打にかこつけての混雜に紛れて二人を落す際どい場面の情景など誠によく表れてゐる。

二人の情死事件は寶永三年六月であつたとの説もある。又種彦は「高野山萬年草紙」(文化十四年)の序文の中に「昔この山足に容華絶代の婦人あり、名をお梅といふ。愛童某と通じ女人堂にて情死を遂げ、同穴の塵とならんとす。人あつて死をとどめ龜鶴の壽を全うせし、其縁故を一條の戯曲に綴り、萬年草と呼びなせるは、かの近松翁が筆なり」といつてゐる。

「高野山萬年草」は本曲の外題替である。改作物に「角額つひなひ嫉あやむ蛇柳へびやなぎ」がある。明和八年五月豊竹和歌三座上場で、原作に高野山の蛇柳の傳説を取合せたもので、作者は竹本三郎兵衛である。又寶曆四年四月市村座上場の「我衣手わがころもてまじすのあはぢ蓮はす曙あけぼの」は俗に常勢津の「高野心中」と呼ばれる古曲で、壕越二三治がお梅桑之助の心中に熊谷蓮生坊をからませて趣向を立てた淨瑠璃で、原作と頗る作意が變つてゐる。八行四十丁本を以て校訂した。

丹波與作待夜のこ小室節むろぎし

外題年鑑(明和板)に寶永四年六月「源氏十二段」の切に出したとあるが、これも従ひ難い。此曲が

「心中重井筒」よりは後の作でなければならぬ理由は、大團圓の「與作踊」のクドキの文句によつて明かである。既に「重井筒」を前のやうに寶永四年末と考定する以上は、此作は早くとも寶永五年でなければならぬ事となる。處が道行の文中に「契りそめしは一昨々こふむ年とし拔參宮の道連れに、そなた櫛田の、眞中ほどで」といふ句がある。これは寶永二年に非常に流行した拔參宮を當込んだ句である。と見られる、併し拔參宮はその前後にもあつたから、これだけで斷定するのは少し早計であらうが、この作を少し改修して寶永五年顔見世に京都の夷屋座で興行して居る（後に述べる）事實があるから、前の「重井筒」との相關問題をも考量して、寶永五年の作と考定してよいと思ふ。

丹波の由留木侯の女しらべの姫は、關東の高家入間殿の養子としていよく出立の間際になつて、未だ十歳の少女の事として、「山も見えざるかりそめの江戸三界へ往かんして、いつ戻らんす事ぢややら」とお伽小姓共の謡ふ江戸へは行かぬといふ。少年馬子三吉が道中雙六の繪解きをして、又その心を轉じさせる。その縁でお乳の人重の井と哀れな親子の名乗合をする、こゝが「重の井子別れ」の原作。これより先、重の井の夫伊達の與作は浪人して落魄の極、馬方となつて丹波與作といひ、關の宿の白子屋の出女小まんと契つてゐる。姫の一行が關の宿に泊つた夜、與作は小まんの父の急を救ふ爲に三吉を教唆し姫の川金を盜ませたが、三吉は捕へられ且つ己れ、實子たるを知るに及んで、愧ぢ且悲んで小まんと共に宿外れの千貫松で死なうとする。重の井の命乞によつて與作は世に出るといふ筋。丹波與作は早くから俗謡で知られた馬方であるが、始めて劇に仕組まれたのは延寶五年十一月京

上卷 夷講御神為疾の 小むるが 教女考

Handwritten text in a vertical column, likely a transcription of a religious or historical document. The characters are dense and difficult to decipher due to the cursive style and some fading.

都北側の芝店で元祖嵐三右衛門が演じた丹波與作であつて、その籠抜けのやつしが大當りであつたと傳へられて居る。降つて元祿三年に京都村山平右衛門座で「丹波與作手綱帶」が演じられた、富永平兵衛の作で、丹波與作の巷説を丹波の國主橋立主膳のお家騒動に仕組んだものである。又「善光寺與作」といふ古淨瑠璃の正本もあつたといふが、未見の書であるから内容は不明である。兎に角是等の諸作を藍本として、之に關の小萬の巷説を加へ、「與作踊」「馬子踊」(寶永元年刊、松の落葉四所載)等の俗謡を巧に按配して作つたのがこの「待夜の小室節」である。而して丹波與作の戯曲としては本曲が實に劃期的の名作といふべきであらう。宇治加賀掾の正本にも同外題のものがある。下巻の道行以下は文章も大分相違し、與作踊もない。「傾城反魂香」などと同じく加賀掾の手で改修したものと見るべきであらう。「待夜の小室節」が竹本座に上場された寶永五年の顔見世に、京都の夷屋座で此作を借りて筋を少し改め「ゑびす講結御神」の外題で興行した、而も狂言本には原作の淨瑠璃を載せてある。「待夜の小室節」は正徳二年三月に「傾城懸物揃」の切として興行した時「丹波與作」と改められ、後には此外題が専ら行はれた。更に此淨瑠璃は享保十七年六月竹本座で「信田小太郎」の切として勾欄にかけられた時は「伊達染手綱」と改題された。その正本を見るに文章は原作と同一で只道行の外題を「道行戀路の月毛馬」と變へたに過ぎない。然るに寶曆元年二月竹本座上場の「戀女房染分手綱」に至つて大改修が行はれた。作者は人形遣の名人吉田冠子(文三郎)と三好松洛とで、場敷を多くし筋を複雑にし、舞臺上の技巧を豊富にして、非常に歌舞伎化した。第十段重の井子別



東二月朔日

竹本鏡後掾

大夫

竹本大隅掾
 兼 竹田出雲掾

はるのこゝろに
 ねむるは
 春のついでに
 花のよすがに
 恋のこころに
 涙のよすがに

振袖の乳人

苗袖の招婦

はるのこゝろに
 ねむるは
 春のついでに
 花のよすがに
 恋のこころに
 涙のよすがに

恋女房深分糸網

卷三十 終 全



弟三
 弟二
 弟一

竹本大隅掾
 兼 竹田出雲掾
 竹本大隅掾
 兼 竹田出雲掾
 竹本大隅掾
 兼 竹田出雲掾

戀女房染分

れの段が最も名高い。この作は同年秋、江戸の中村座に上場されたのを始めとして、三都の歌舞伎で引續いて何度となく繰返されてゐる。

最後に本曲が他の淨瑠璃に及した影響を見るに、一中節では其道行の詞章を取り外題もその儘「興作小まん夢路の駒」と呼んで居る。豊後節の開祖宮古路豊後がまだ初代一中門下で都半仲と稱へて居た頃の作曲に係るもので、その典雅哀婉なる曲調は、今尙一中節に語り傳へられて居る。又江戸長唄の名曲「興作」も此系統を引くものである。寶曆元年秋中村座で「染分手綱」が初めて演じられた時、その道行淨瑠璃「乗掛妹脊小室節」を佐野川千藏が語つた。千藏は女形の役者であつたが、一中節の名手で義太夫節をもよくし、美聲を以て鳴つてゐた。その後明和元年に市村座で「染分手綱」興行の時その道行「乗掛情の夏木立」を富士田吉治が語つた、これが即ち江戸長唄の「興作」であつて、吉治は千藏が長唄に轉じての藝名である。また曲は絶えて詞章のみ残るものに、宮古路豊後の正本「丹波興作夢路駒」、宮園節の染分手綱十段目「三吉愁ひの段」等がある。

校訂用原本には八行三十五丁本を用ひ、七行五十九丁本を以て對校した。

淀 鯉 出 世 瀧 徳

大阪北濱の富豪淀屋辰五郎が町人不相應の豪奢を極めて遊蕩に耽り、遂に金子借用證偽造の罪に

坐して元祿二年追放を命ぜられ、資財没收、家屋敷闕所となつた重件を任組んだもので次のやうな筋である。八幡の富豪江戸屋勝二郎が新町茨木屋の吾妻に溺れて贅の極りを盡し、忠僕新七夫婦の苦諫を憤つて之を土足にかけ、遂に吾妻を落藉する事となつた。然るに悪手代總兵衛は主人の遊蕩に耽るに乗じて私腹を肥さうとして、主人の名を用ひて京都の某公卿の私印偽造迄行つたので、其罪に坐して財産官没の上追放された。勝二郎は困窮の極吾妻を奈良の木辻に二度の勤めをさせたが、新七夫婦の盡力によつて家名再興を許されるといふのである。作中最も異彩を放つのは忠僕新七であつて、これは淀屋の手代六兵衛をモデルとして作者の理想とする手代を描いたものと思はれるが、結末に於ける彼の述懐は、何人にも感激を與へずには措かない眞實と熱誠とが籠つてゐる。

本曲は外題年鑑(明和板)には元祿十三年四月上場となつて居るが、之も亦誤りである。作中に「重井筒」の噂の出で居る事と、寶永六年十一月歿する坂田藤十郎がまだ在世中である事を暗示する句があることにより「重井筒」よりは後で、寶永六年十一月よりは前であり、恐らくは辰五郎の父古安の十七回忌を當込んで寶永五年冬か翌年春作つたものであらうといはれる。(高野博士著「世話浄瑠璃詳解」による) 外題名については、大阪を追放されて忠實な元の手代等の情で奈良に逼塞して居た辰五郎が、先祖傳来の御朱印地たる山城八幡の田地三百石頂戴を歎願の爲に寶永六年江戸に下るのを利かせて、淀川名産の鯉の瀧上りに因んで淀屋の前途を祝つて付けたものであらう。

校訂用原本は八行四十丁本。

おなつ
清十郎 五十年忌歌念佛

寶永六年正月二日から竹本座上場。作者五十七歳。

實説については西澤一風の「亂脛三本槍」(享保三年刊)や松村操の「實事譚」(明治十五年刊)によれば、

清十郎は播州姫路の旅籠屋但馬屋九左衛門の手代であつたが、主人の一人娘のお夏と密通した事が分つて暇を出された故、お夏と牒し合せて大阪へ駈落しようとして船に乗る處を捕へられた。その折但馬屋で金子が紛失したので嫌疑が清十郎にかゝり、且つ主人の娘を勾引した咎によつて死刑にされた。これは寛文二年の事である。(一風は中興世話早見年代記に萬治三年情死としてあるが、これは近松の作から逆算したのかも知れない)お夏は悲しみの餘り一時發狂したが、のち正氣に復したものと世の物笑となり智に來る者もないので、同國片上といふ處に茶見世を出して七十餘歳迄生きて居たと。

残つたお夏より死んだ清十郎に世の同情が集つて清十郎節が行はれ出し、「奴俳諧」(寛文七年刊)の題目にもなり、靈元上皇の御吟詠にさへも入り、西鶴の「五人女」の一の筆に描かれていよ／＼有名となつた。歌舞伎でも早く舞臺にかけた事は西鶴の「上方の狂言になし」の句によつて證明されるが他に記録はなく、又操では寶永二年十一月竹本座で「お夏清十郎笠物狂」を上場したと外題年鑑にあるが、正本の所傳を耳にしないから現存の戯曲としては木曲を最古の物としなければならぬ。

昔に古いのみではなく、又最も勝れたものといつてよからう。

近松は原事實を劇化する爲に「曾根崎心中」の九平次型の悪漢勘十郎を黠出し、大阪河口の船乗場で彼が清十郎の親父佐治右衛門に一杯喰はせて證文を書かせるのが發端で、此證文が種となつて清十郎は主人の勘當を受けるが、憤りに燃える彼は、暗闇の人違へで勘十郎を殺す積りで朋輩の源十郎を殺し、お夏は狂亂し、清十郎は刑場の露と消えるといふ工合に事件の大筋を運ばせて居る。「お夏笠物狂」の段に俗謡を巧に連続して恍惚幻夢の詩美を漂はせた手際は、前に述べた「薩摩歌」の「夢分船」と並べて世話物中の雙絶といふべきであらう。

又本曲中で清十郎の許嫁おさんが妹おしゆんと共に歌比丘尼となつて夫の行方を尋ねるのは「薩摩歌」のおらん比丘尼から生れ出たものであらう。種さがしの序に、巾の巻でお夏が蚊帳の開眼をしようとして清十郎を其中へ引張り込む仕打は「心中萬年草」の中の卷雜賀屋の二階でお梅と糸之助が新調の夜具にもたれ合ふ場面の轉化であるが、お夏の熱情的で大膽な仕打は到底お梅の及ぶ處ではない。

この作は「飾間掲布染」と改題されて正徳年間に京都の榊山四郎太郎座と民屋半之助座とで二回演じられた。又「笠物狂」の一章は「丹波與作」と同じやうに都半仲によつて作曲されて一中節の語り物として今に傳へられてゐる。義太夫では改作物としては享保十六年四月豊竹座上場の「和泉國浮名溜池」(並木宗助、安田蛙文合作)がある。この作では清十郎は勘十郎にお夏との密通を許かれて主家を追はれ郷里の水間に歸つたが、主家へ返濟すべき五十兩の金策に窮した。養父の佐次右衛門が娘



紙表「染布襦問飾」

おさめを賣つて金を調へる、清十郎はおさめを請出さうとあせつて、悪人に乗せられ溜池埋立を計畫して失敗するといふ風に作りかへてある。安永七年十二月北堀江座上場の「夏沿衣清十郎染」は清十郎とお夏とおしゆん（清十郎の許嫁）の三角關係を主想とした作である。其他歌舞伎や豊後節にも改作は多いが枚舉の煩に堪へない。

梔あみぞ 狩かり 劍つるぎ 本ほん 地ち

寶永六年九月九日から竹木座上場。

謡曲「紅葉狩」を材題として、これに平國たけくにの寶劍の威力を取合せて脚色したものである。平維茂が禁中の妖怪退治の功によつて餘吾將軍に任ぜられて、戸隱山の惡鬼退治の命を蒙り、當座の恩賞として宮中の上臈世織御前を妻に、又引出物として平國の寶劍を賜つた。橋諸任といふ維茂の競争者が之を妬んで世織御前の興入の夜途上に要して奪はうとした。此騒動の時寶劍を持つて居た鷹巢帶刀太郎高房は行方不明となつた。維茂は情人玉ゆら姉と世織御前とに同文の手紙を與へて寶劍捜索の途に上る。然るに帶刀太郎は寶劍を携へて伊吹山の麓に支屋となつて居る昔の家來久作夫婦の許を尋ねて之を托して歸京したが、不慮の行違から其妻に刺されて死ぬ。末期の遺言によつて帶刀太郎の妻は一子房若と共に久作の許に寶劍を取返しに來る。久作は二人を殺して寶劍を諸任に捧げて恩賞に預らうとする。女房は一人息子を殺して迄苦諫したが聞入れずして慘殺すると、その首が

寶劍をくはへて虚空に飛去り、久作は房若親子に殺される。寶劍を探しつゝ、戸隠山に向つた維茂が雲間より落ちて來た平國の劍の威力によつて惡鬼を退治し、折柄攻寄せた諸任を滅す、房若は維茂に召抱へられて鷹巢小太郎廣文と名乗るといふ筋である。第三段艾屋の段が最も技巧的であり、第四段は謡曲「紅葉狩」の翻案である。

これより先淨瑠璃で「紅葉狩」を材題としたものに大和少掾藤原貞則の「紅葉狩」がある、明曆四年七月京都正本屋九兵衛の刊行である。維茂惡鬼退治の段は謡曲に基づくので本曲と相似て居るが、其他は兩曲の間に左程の關係は見出せない。宇治加賀掾の正本「戸隠山太平御劍」は本曲の改題である。校訂用原本は七行九十四丁本で、十行四十二丁本と對校した。

二 郎 兵 衛
お き さ
今 宮 の 心 中

寶永七年正月十三日から「曾我虎が磨」の切として竹本座に上場された。作者五十八歳。

寶永六年の秋大阪本町二丁目菱屋四郎右衛門の下女きさと子飼の手代二郎兵衛とが今宮の戎の森で情死した事件を仕組んだものである。菱屋から暖簾を別けられた由兵衛が菱屋の人々を招いて西横堀の涼船で遊山をする。こゝへおきさの在所の親三田村の太郎三郎が來て縁付かせる爲にきさの暇をもらはうとする。きさは二郎兵衛とねんごろして夫婦約束迄して居るから聞入れない。きさに

心ある由兵衛は自分に氣があるからと己惚れて、太郎三郎が無筆なのを幸におきさの縁談は菱屋隠居貞法任せといふ證文といひながら、自分に都合のよい文句の證文を書かせて判をさせる。陸で見居た二郎兵衛が宵闇に乗じて石を打つので、由兵衛は亂暴者を捕へようと上陸して人違ひをしてとんだ目に逢ふ滑稽の場面で上巻は終る。中巻は菱屋の内の場で、おきさと二郎兵衛が主人四郎右衛門の眼病療治の灸點をおろす間に、腰の中着から用箆筒の鍵を窃取して箆筒をあけ、由兵衛が太郎三郎に書かせた證文と思つて破つたのが大事の家質の證文だったので申譯がないと思ひ込み、且つ隠居貞法に強意見をされておきさを斷念せねばならぬ事となつたのを悲み、遂におきさと連立つて今宮の森で心中する。その時日野絹一反を松の木に懸け、二人並んで縊死を遂げ、掛鯛心中と世間に評判を残した。男は廿二、女は五つ年上の廿七歳であつた。

紀海音は之を改作して「丸腰連理松」と題して正徳二年四月（或は正徳元年か）豊竹座の勾欄にかけた。此作では由兵衛といふ色敵の代りに仕立屋彌兵衛を以てし、その奸計によつておきさは二郎兵衛の手から奪はれようとする。それを兄手代の權兵衛が一時救つてやるが、前途に添遂げる望のないのを悲んで五月廿三夜待の曉に今宮の森で情死するといふ風に作つてある。作意も文章も原作に及ばぬ。

校訂用原本八行四十丁本。

百合若大臣野守鏡

寶永七年五月六日から竹本座上場。

豊後の旗頭太宰太郎和田丸は平城天皇から九州に來寇した蒙古^{むく}裡軍^{りぐん}征討の命を受け、百合若大臣の稱を賜り、且つ天香具山の香取丸・綠丸雌雄の鷹の羽で矧いだ一對の名高い矢の中の甲矢^{とや}を下さり、又凱陣の上は妻とせよと禁中一の美人立花姫と婚約を許された。香取丸と綠丸とで矧いだ一對の矢は雌雄相慕うて所を別にして置いて一所に廻寄ると言傳へられた。百合若は出征して敵を敗つたが、其臣別府雲足・雲澄の兄弟が百合若の睡眠癖あるを利用して彼を玄海の孤島に放置したまゝ歸朝して、戦死と復命し其國を横領した。立花姫は都で焦れ死んだが、その魂魄が綠丸の乙矢に乗り移り鷹の精靈と化して立花姫の姿を現し、絶海の孤島で百合若と契り一子還城丸を儲けて四年を過ごした。處が病氣の爲に従軍出來なかつた執權府内秀主の次男秀虎は嚴島明神の冥助によつて玄海の孤島に百合若に邂逅して本國へ伴ひ歸る事となり、こゝに還城丸父子と鷹の精靈たる立花姫との哀れな別離の場面がある。又他の一方に於ては、秀主の嫡子悪文治秀景は酒色に溺れて勘當され駕籠舁と成り下つてゐたが、主家の變を聞き、昔の武士に立還つて忠勤を致す秋と思ひ、有馬の浴客の刀を窃取しようとして圖らず父に逢ひ、こゝに父子協力して主家再興を企て、秀景は其妻松が枝を偽せ盲に出で立たせて別府邸内に入込ませて雲足を誘ひ出し、折柄來會した百合若秀虎と共に悪人を滅すといふに終る。

外題名は三段目切の鷹の子別れの條に「巖の方に飛上り、鳴き交したる敏應^{たてふ}の野守^のの鏡目には見

て、手には止らぬ妹背の中思ひやるにも哀れなり」とあるのによつて、百合若大臣と鷹の精靈と契つた事を利かせたものと思はれる。なほ又「はし鷹の野守の鏡」の出典は「はし鷹の野守の鏡得てしがな、思ひおもはずよそながら見む」の古歌であるが、この歌については「俊頼口傳」に、天智天皇の仰せでそれた鷹を捜し出すのに野守の翁が野に溜つた水面に映る鷹の影によつたので、野に溜る水を野守の鏡と言ひ初めたとあるが、その傳説に因んで姿は見ながら遂に再び同棲は出來ない鷹の化現であるとの意を利かせたものであらう。

この淨瑠璃は百合若の傳説を材題とした幸若舞曲の「百合若大臣」を藍本として居るが、四段目の松が枝僞せ盲の趣向は、幸若舞曲の「鎌足」の末段鎌足が僞せ盲となつて入鹿に近づき、其兒の火中に陥つたのを熊と救はずして入鹿に心を許させる條に基づいてゐる。尤も井上播磨の語り物に「百合若鷹」があり、又元祿十三年に大阪の竹島座で「今用百合若」を、同年京龜屋座で「百合若唐船」が興行されたといふ風に百合若やばりであつた、この風潮に促されて脚色するに至つたものと思ふ。

趣向について云へば、第一段の山崎關戸院の夢の場は後の「刈萱桑門筑紫藤」の學文路慈尊院の夢の場の原作であり、第三段立花子別れの場は、信太妻や三十三間堂の子別れと同型であつて、「蘆屋道満大内鑑」の狐葛の葉子別れの段の原據となつてゐる。又第三段の有馬の池の坊の秀主秀景父子再會の場は最も劇的であり、そして秀景の駕籠舁姿は坂田藤十郎の舞臺姿を思ひ起させる。

七行八十二丁本によつて校訂した。

心中しんちゆう又または氷こほりの朔日ついで

寶永七年六月十六日から竹本座上場。但し作中に「一昨年の大地震」の句があるが、これを寶永四年の地震を當込んだのだと解する時は寶永六年の作となるが、他に有力な傍證が無いから、今姑く「外題年鑑」に従つて置く。

播磨藩の鷹匠の娘つやは、父が浪人となつた爲に大阪の叔母の許に預けられたが、その家の貧苦なを見かねて曾根崎新地に身を賣つて平野屋の小かんと名乗つた。そして備後町の銀冶利右衛門の弟子平兵衛と馴染を重ねたが、平兵衛は小かんの身請金の不足額たる四兩二分の金策に窮して、大和の穢多村の者から雪駄の裏金の註文を取つたので主人に勘當された。此時國許から小かんの昔の乳兄弟であつた侍が迎に來て、身請をして連歸らうとして情理を盡して説き、又母の手紙を渡す。小かんは親の情を思ひながらも、男の愛に引かれ、相携へて北野の藍畑で情死するといふ筋。

二人の情死は寶永七年六月朔日の朝の事であつたから、それを利かせて「氷の朔日」と外題につけたのだといふ。

加賀掾の正本「天滿神明氷の朔日」はこの外題替である。

八行四十二丁本により八・九行三十一丁本と對校した。

神明しんめい 天満てんまん
 氷こほりのの智ち白しろ
かぢや平此常ひのやめかへ
たひ
 二條通
 栗本屋
 九兵衛

天加賀屋
君ま大倉若重り
 男於徳あ三郎又神
 島ま辰松幸助
宇治橋を交
 宇治橋を交
 宇治橋を交

紙表「日期の氷明神満天」

以上甚だ不完全ながら解題を終つたが、最後に校訂の方針について一言附加へて置き度い。校訂者は先づ第一に信賴すべき正本蒐集に努力した。正本としては延寶七年に宇治加賀掾によつて八行本が印行されるやうになつてから正徳元年に七行本が行はれ出す迄の正本としては、八行本(多くは山本板)が最も信憑すべきものであると信じ、成るべくこれによる方針を採り、傍ら十行本乃至七行の再板本又は繪入細字本を對校用とする事とした。

次には語り本の原形を存すべきか、全然讀み本とすべきかについて考へたが、淨瑠璃は人形に合せて語られる物として書き下されたもので、その制約に基づく特殊の句法によるものであり、而も一度句法を改め曲節ふしづつ付を省いて讀み本としたものは、原本がなくては語り本に還元する事は絶對に不可能である以上は、原本を尊重する立場にある本刊行會の出版としては、語り本として覆刻するのは當然の事であると考へた。

すると次に問題となるのは正本の曲節ふし墨譜はかせを如何に取扱ふべきかである。墨譜は語り物としては大切には相違ないが、活字本では之を移す事は不可能であるから割愛するより外はない。次に曲節付は曲趣を解し、文勢の轉換を知る上に必要と思はるゝ

地 詞 フシ オクリ ナホス スエテ 序 キリ 三重
の類、及び他の先行及び並行音曲を取り入れた符標たる

平家 謡 舞 説經 文彌 播磨節 歌 踊歌 鉢夕、キ 歌祭文 歌念佛 順禮歌 木遣

音頭 馬子唄 大黒舞 鳥追

等の類はすべて保存した。

それから句切りは、語り物としての特殊の息つき語り口を想像する上に於て、極めて必要であると信じてすべて原形の儘とした。但し讀解の便を圖つて、假名遣を正し、漢語佛語又は人名地名等には適當の漢字を宛てた。それが爲には出来るだけの努力をしたが、併し尙不備の點や誤解した箇所もあらうと窺かに恐れて居る。

また場面想察及び當代の風俗研究の爲にもと考へて、出来るだけ挿繪を多くし、正本の様式を知る便を圖つて、その見本をも挿加へて置いた。

大正十五年十月

校訂者しるす

新編 漢書 卷之九

漢書卷之九 禮書九

禮書九 禮記卷之九 禮運第九

禮運第九 孔子作春秋至此而絕筆

禮記卷之九 禮運第九 孔子作春秋至此而絕筆

禮記卷之九 禮運第九